

## 希望の探求 テモシー・ラドクリフ O.P.

2007年6月2日 渋谷教会

再び日本でドミニカン・ファミリーをはじめ皆さんとお会いすることは大変嬉しいことです。人に会って、どの国が最も興味がありますかと尋ねられたら、日本ですと答えます。イギリスと似ていて異なる国だからです。イギリスのように島々から成り大陸に近く、車も正しい側を走り（訳者：人は右、車は左！右、ここに伝統を重んじる両国の共通性があることを暗示）多くの似ている点があるが、親しみを持たせるのかと思います。同時に、豊かで大変異なる古い文化を有していますね。類似性と相違が大変魅力的です。

希望について話すよう願われましたが、この点について最近、*What is the point of being a Christian?* 『キリスト者であることの意味？』という本の中で述べました。書いたことを繰り返しても構わないからと言いましたので、英語かフランス語の本を皆さんが沢山買ってくださいることを期待しますね。

ローマにいた間（1992年から2001年まで総長）、1年のうち8ヶ月は兄弟姉妹を訪問する旅の途上にありました。多くの文化と出会いました。ラテン・アメリカで、人々が歌い始める夕べがやってくると恐れしました。結局、遅かれ早かれ、「テモティー歌ってよ」と誰かが叫ぶからです。歌は下手ですし、時差で、いつも歌詞を忘れますし、でも“おい、おまえはどこへ行くんだい、と旅の途上の騎士が尋ねた“という大変短い歌を覚えました。

この歌は黒死病・ペストが流行した時代、中世の終わり頃（14世紀後半）に作られた歌です。絶望の時代でした。世の中が崩れてしまうと思われた時代でした。希望がありませんでした。良かったら、一番を歌いましょう。

おい、おまえはどこへ行くんだい？と旅の途上の騎士が尋ねた  
ぼくの神に会いに行くんだ、と少年は立ったまま答えた。  
立ったまま、立ったまま、立ったままは良かった。  
ぼくの神に会いに行くんだ、と少年は答えた。

騎士は悪魔・悪鬼で、少年は死に面したキリスト者の魂を表しています。将来がありますか？どこかで彼の命だけが助かるのでしょうか？結局、手に頑丈な杖を携え、心に信仰と教会を抱えて、少年は信じ彼の神に会いに行くと言います。歌は絶望の中にあって希望の勝利を歌います。

我われの社会にも同様のチャレンジがあります。オリバー・ベネット（ワービック大学教授）は、我われがこの新しい千年を始めるにあたって、集団的な閉塞感に覆われていると論じています。環境破壊の脅威、豊かな者と貧しい者の富の二極化・不均衡、アフリカの国々の腐敗、テロと、宗教が絡んだ暴力の蔓延などと対面しています。若者は何を希望できますかね？わたしが若い修道士の一人であった60年代、人々はよりよい将来がイギリスにはあると信じていました。あらゆることが可能のようでした。ビートルズが一世風靡していました。パリでは、学生たちが‘権力への空想’など壁に落書きしていました。大英帝

国から国々は自由を勝ち取り（独立）、将来を企てていました。イギリスの食べ物さえ改良されました。蛙の足やカタツムリがレストランに現れ（訳者：フランスとの交流が頻繁になったということ）、我が家では父が見ていない時に母がガーリックを料理に加えようとしてしました（訳者：イギリス料理は調味料の少ない味なしのことが多い）。神の国は近いにちがいない！と。

40年後の今、樂園は遠いようです。子どもたちは将来へのどのような夢を持っているのでしょうか？環境破壊が地球に混乱をもたらしつつあるというのがいたるところで認められています。

9.11以降のいわゆる‘対テロ戦’はエンドレス（終わりなき）暴力の兆しです。おそらく多くの国での劇的な出生率の低下の原因の一つではないでしょうか。両親は行き場のない世界で子どもを育てることをためらっています。それゆえ今この刹那だけに生きるというのが我われの試みです。消費至上主義の文化は今この刹那を楽しむだけです。‘今この時、世代’ **Now Generation** の文化です。飲み食いお祭り騒ぎ、なぜなら明日何が起こるか解らないからです。ブッシュ政権は‘90日フォカス’、すなわち最も近未来に起こることだけを取り上げます。わたしたちは氷山へ向けて接近するタイタニック号の船上で楽しんでいるシンフォニー楽団のようです。

チャレンジは希望を見出すこと。これはキリスト教が提供するものでしょう。キリスト者である我われの先輩たちは、進歩・発展の神話への信頼によってしばしば支えられてきました。より良い世界を夢見て、全世界は進歩の止まることを知らない波へ引かれていくことは避けられないことでした。キリスト者は更に先へ、経済的豊かささえ越えて、神の国へ向けて歩み続けました。今、人々は進歩の夢を失っています。しかし我々はびっくりさせるような、生き生きとした、素晴らしい希望を提供することができます。

どのようにキリスト者はこれを成し遂げますか？将来について他の人々とは異質の夢を提供しますか？我われは善が悪に打ち勝つ最終的・最大の勝利を信じています。神の国が到来し、最後にすべては死に、受難することを信じています。しかし問題はどのようにこれが生じるか語るストーリーを有していません。我々はヨハネの黙示録を吟味することをしないで、言うことができません『皆さん、大丈夫。5つの伝染病・ペストが降りかかり、2つは過ぎ去る』と。が次の百年、千年に人類に何が生じるかについての特別の機密情報を持ち合わせていません。

さらに、わたしは我われが持ち合わせていないのは良いと言いたいです。20世紀は人類の将来のストーリーを知っていた人々によって受難しました。レーニンとスターリン、ヒットラーとムッソリーニ、毛沢東とポルポト、彼らは樂園への路線図を有していて、途中で何百万もの人々を殺戮しました。2年前に初めてアウシュビッツを訪れました。ヨーロッパ各地からの鉄道線が強制収容所に導かれていることを示す大きな地図がありました。線はガス室で終わっています。

文字通り線の終わり・端です。将来のすべてのプランと模様、すべての優秀なテクノロジーは絶望で終わり、何百万人もの人が殺されました。ラビ・フーゴ・グリーンはアウシュビッツに着いた時の様子を、収容所の入り口はテフィリーン

(ユダヤ人の祈りのショー) で散らかっていたと描写しています。それは収容所ではもはや祈りの意味がないとのしるしでした。希望も将来もありませんでした。

前世紀に、どこへ向かうか、どのように向かうかを知っている人たちを見ましたが、往々に殺戮地となりました。多くの人々が非常に恐れていることは、‘対テロ戦’が人類にさらなる大量殺戮に導く路線図を課す別の試みになるのではないかということです。

キリスト者の希望はストーリーや将来への路線図を所有することではありません。我われの根本的なストーリーはイエスが亡くなる前夜、最後の晩餐です。その夜は、逆説的に、弟子たちが将来を語るあらゆるストーリーを失った時でした。エルサレムへの途上で、何が起ころうか語るストーリーに確かに支えられていました。イエスは支配者ローマ人たちを追い出しイスラエルを解放する。イエスは全世界に法規・支配を課していた邪悪な皇帝支持者たちを制覇する。狭く、ごく小さなイスラエルは自由と正義の旗頭となる。エマオへの弟子たちがイエスに：「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してください」と望みをかけていました」(ルカ 24:21) と告白したのです。彼らが語ったストーリーは今ことごとく崩れました。彼らが期待していた方は死ぬ寸前であり失敗しました。ユダはイエスを売り、ペトロはイエスを拒もうとしています。他の弟子たちは恐れて逃げようとしています。イエスの受難と死に直面して、彼らは何も語るストーリーを有していません。この将来が消え失せた時、イエスはパンを取り、祝福し、‘これはあなたたちに与えられるわたしのからだ’と彼らに言いました。同じようにぶどう酒も。

これはキリスト者の希望の逆説です。キリスト者として、わたしたちはあの最後の晩餐のストーリーを記念するために集まります。わたしたちのストーリーです、あの方に生きる意味を見出します。さらに語るストーリーがない時に語るストーリーです。祭壇を囲んで共同体として集まり、そして共同体が崩れた時を記念します。希望は、希望が消え失せようとする瞬間に立脚しています。

しかし、逆説はそれよりさらに深い意味を有しています！あの夜についての最大の意味は福音(複数)であり、およそ40年後にその形が見出されます。それらは危機のもう一つ、すなわち二回目の将来が消え失せる時の結果です。復活後、迫害と受難に耐えながら、弟子たちは福音をローマ帝国の各地の大都市に伝え歩きました。クライマックスは、ネロによる教会の大迫害時代の60年代後半のローマでした。教会の偉大な創立者である、ペトロとパウロは殉教しておりました。小さな教会は不一致により分裂し、キリスト者は互いに権力におもね、互いに裏切ってさえたのです。暗黒の恐ろしい時でした。「イエスは来られる。いつでも再臨する。神の国は近い」と互いに言い合いました。しかしイエスは再臨しなかったのです。希望の恐ろしい危機でした。より正確に言いますと、イエスは来られた、しかし全く期待はずれの仕方で、つまり栄光のうちにはなく福音の著述のうちに来られたのです。おそらくキリスト教の第二の大きな危機がなかったかのようにマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは告げておりません。

共同体として集まりエウカリスチアすなわちミサを捧げる毎に、イエスが死と捨て去られることに直面している時と突然弟子たちが将来のストーリーを失った瞬間を記念します。また、第二の大きな将来のストーリーを失った時、すなわちイエスが栄光のうちに再臨することに失敗した時の光のうちで書かれた福音の言葉でそれを記念します。そこで今、神の国への望みは将来への路線図を与えないことを知らなければなりません。むしろそれを失うと生まれます。片隅で起こる事を知らないことに恐れることはありません。これは我われの *spécialité de la maison* お家芸（訳者：逐語訳するなら家庭の自慢料理）です。そこで今、キリスト者は知らない将来に直面した時、人類（人々）に提供できる希望を有していなければなりません。

イエスがこの瞬間に何をしたか見ましょう。イエスは弟子たちにご自身の死と復活を話されました、がかれらはイエスの言ったことの一言も理解しませんでした。彼らが思い出したことはイエスがしたことだったのです。パンを取り、祝福し、裂いて弟子たちに与えながら言いました「これはあなたがたとすべての人に与えられるわたしのからだである。」同じように、ぶどう酒も。イエスはしるしを行いました。力あるしるし、わたしたちの希望の秘跡です。

最後の晩餐は2種類の力の衝突でした。政治的権力と宗教的権威がありました。残酷な黙して語らない冷厳な力でした。イエスを力によって捕らえ、牢に入れ、蔑み、殺害した力でした。ピラトがイエスに言った力、「お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか」（ヨハネ 19:10）。しかしイエスについての全ストーリー、特にヨハネ福音書はもう一つの力、すなわちしるしと言葉の力を告げます。イエスは、水をぶどう酒に変え、盲人の目を開き、口の利けない人を話せるようにするなどのしるしを行います。

これは、あたかもイエスが1世紀のハリー・ポッターであるかのような魔法の力によるものではありません！意味とまことに基づく力です。そこでイエスはピラトに明言します、「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」（ヨハネ 18:37）。ピラトは「真理とは何か？」と尋ねますが周知のように答えを待ちません。兵士がいますから必要ないのです。

最後の晩餐は残酷な力と、しるしと意味の力、2種類の力の衝突です。また、ピラトやヘロデのような強い人々の力と、これに抗して、パンを取り、裂き、死に直面してそれを分かち合う弱く小さくされた人間の力があります。チェコ共和国の前大統領バクレブ・ハレブは「希望とは何かが良いになるという信念ではなく、どのようになろうと気かけないで、何かの意味を成すという確信である」と述べています。それは生きていることすべてが何らかの究極の意味を有するということがいつの日か見出されるであろうとの確信です。言葉を変えて言うなら、幸福や悲しみを伴う人生すべてが何らかの意味を有するというの日か見出されるであろうとの確信です。

エウカリスチア・ミサは我われのキリストへの信頼が、推測することも先取りすることもできない仕方で、いつの日か暴力を克服するであろうことを祝うことなのです。

この力の性質は地球規模の経済力、巨大な軍事力であるこの世の力に対して無

益に見えるかもしれませんが。産業革命の世界で育った我われには特にそう見えるかもしれませんが。強烈なエネルギー、水蒸気や石炭のエネルギー、電力、最終的には核燃料などの動力化に基盤を置いた世界でした。これは全世界を制御する大国の軍事力の覇権と連動しています。特定の因縁、すなわち西洋の覇権に仕える強烈な力でした。特に我われイギリス人は、神に選ばれた人間であって、黙して語らぬ力は神話に仕えることによって神によって義とされるという神話によって煽り立てられてきました。今やアメリカ人がこの同じ神話を継承しています。世界のこのような性質において、しるしと言葉は強烈な力よりより力があると論ずるのは説得力のないことです。意味は頭の中で起こったことだけなのです。また、宗教が真面目にその責任を果たさなければならなかったのです。よく知られているようにスターリンは、教皇はいくつの戦車部隊を持っているかと尋ねました。

しかし世界は変化の過程にあります。産業革命は終わりつつあり新しい世界に入りつつあります。ジグムント・バウマン（リーズとワルシャワ大学教授）はこれを‘現代社会の流動性’と呼んでいました。この世界に流通しているのは重い製品、鉄製品や石炭ではなく、多くのイメージ、ロゴ、象徴やしるしです。この新しい世界でしるしや象徴の力に寄せる見慣れないキリスト者の関心は結局はおかしくないかもしれません。希望のしるしを見つけたなら、世界は気を惹かれて一瞬のうちに世界規模の web で伝える事になるでしょう。小さな弱い人の姿、天安門広場でのタンク（戦車）と対面した学生を考えてみてください。彼のイメージは中国政府にショックを与えました。何て力強い象徴を伝えることができるのでしょうか？

もちろん、9.11 を計画したテロリストたちは、よくこれを知っていました。生命と具体的な損害は、ひどくて、言葉では言い尽くせません。それは最も強力な象徴的出来事だったのです。現代のコミュニケーションの象徴であるジェット機を使って国防省やワールド・トレードセンター（ツインタワー）に突撃したのですから。暴力的で象徴的出来事でした。それは、非コミュニケーション、言語を仲介する一切の拒否を示したひどい象徴的な出来事でした。この事件を介して言えることは、唯一の最終的で効果的示威は、創造力であって破壊ではない。赦し・和解であって暴力で無い。他の行動を通じてキリスト教徒とイスラム教徒をコムニオン・交わりに入れることができるということです。我われのほとんどの人にとって災害の後、最初のイメージは、命を救うために飛び込んでいる消防士、それから、彼らのチャプレンのマイケル・ジャッジ神父の死亡のニュースでした。

印象的な行動の小さな例を皆さんと共有させてください。1 ヶ月間水だけの断食によって、一部のアメリカのドミニカ会士たちは、9.11 の最初の記念日を祝うことに決めました。他の人たちは、わたしのように、あるいは、2, 3 週間と、短期間だけ参加しました。体重を減らすには好い方法ですよ！戦争の脅威が広まった時、もう一つ目的となりました。‘他のやり方があるに違いない’と画いた T シャツを皆が着ました。ユニオン・スクウェア、グラウンド・ゼロの北側にキャンプし、毎日、我われに質問に来る人、パンフレットを読む何百人もの人々に訴えかけました。多くのユダヤ教徒、イスラム教徒が 1 日 3 度の祈りに

参加しました。驚かせたことは断食の象徴的な意味が直ぐに理解されたことでした。ある若者が毎日わたしたちの傍でかつてなかったほどの美味しい臭いのハンバーガーとフレンチフライを食べ、「何で、皆は何も食べないの？」とからかったことを除いては。人々はこの象徴的な意味を理解しました。説明しなくてもよかったのです。毎日 TV カメラとジャーナリストがそれを伝えてくれたからです。

今、明らかにそれが効果的であったとは思われません。というのはブッシュ大統領がトニー・ブレイヤーに、ドミニコ会士がニューヨークで断食しているから、戦争を終結しようという電話の記録もありません。しかし、発言や行動の意味についてのこのような関心によって、希望が与えられることが必要だろうと考えます。ここに人生が不条理に定められていないという意味を垣間見ることができます。キリスト者としてさらに先を見越して言いたいです、このような小さな行動によって、運命・宿命の覆いはずし、神が将来を作るよう働かれています。

イエスはイスラエルのすべての盲人の目を開いたわけではありません。人は、1人の盲人を癒やすことがそんなに重要かどうか疑問に思うかもしれません。カナでイエスはワインが尽きた婚宴のすべての問題を解決はしませんでした。しかしこれらのしるしは創造し再創造する神が話される言葉の部分です。とにもかくにも、あるジェスチャーが力強く神の言葉を語ることは大変弱く小さなことではあります。

2年前にアメリカ人司祭によって運営されている、プノンペン（カンボジア）のエイズ・ホスピスを訪ねました。世界中のエイズ・ホスピスに行ったことがありますが、このようにやつれ細った人々の姿を見たことはありません。ある人は少しの間家庭に戻るに十分な力がありました。が多くの人はそこに死に場を求めてくるのです。一人のやせ衰えて骨だけの若者が顔に大変穏やかさをたたえて髪を洗われているのを見てました。こういうことが歴史の流れの中でどれほど重要かと思うことは簡単ですよ。2、3人は少しより長く生きて、それから、尊厳に亡くなります。

シェークスピアのヴェニス商人で、‘なんて遠くから、小さいロウソクは、汚れた世界で、光線、輝きの良い行為を見せるでしょう。’と、ポーシャが語ります。神がより良い世界を形づくるジェスチャーであるかもしれないので、小さなジェスチャーが本当に現実を再構築するかもしれないことは、我われキリスト者の望みの一部です。イエスは、我われが最少の者にたとえ何をして、我われがイエスにすると言います。我われがすることの多くは、何も成し遂げないような小さなしるしを実行することかもしれません。しかし、生命と真実と意味のケアをします。恵み・優美さのために小さな窓を開けています。‘小さなことは美しい’。

イエスは、ありふれたしるしはしませんでした。それは、創造的で変化をもたらす行為でした。イエスは、敵の手に渡されることになっていました。帝国の残忍な力に、弟子のうちの1人によって渡されます。しかし、これをただ受動的に受け入れませんでした。彼は、それを恵みの瞬間に変えました。裏切りを

恵みの瞬間にしました。『それで、お前は私を手渡して、逃げる。さて、私はこの手渡しのチャンスをつんかんで、私自身をお前の恵みとする。』

希望は、悪より強い善に賭けることではありません。神には最後の言葉（我々を救うために時間ぎりぎりに駆け足でやって来る西洋の映画の中のヒーローのような）があると言うことは、的を射ていません。我々の望みは、善を悪から導き出す神の無限の創造力と災難から導き出す交わり・コムニオンです。それで、憎悪に直面して、我々は和解を示すしをしなければなりません。

それでは、想像することができるか覚えていることができる創造的なしるしは何ですか？私は、二つのことをお話したいです。一つは私がフツとツチの民族紛争の間、ブルンジにいました。

それはまだ続いています。ある年、国の北部のドミニコ会の観想修道修道院を訪問したかったのです。陸路で行くことは本当に危険でした、そこで、我々は時々飛ぶ国連の小さい飛行機で行く予定でした。しかし、増大する紛争のため、国連は国から撤退しましたので、我々は車で行かなければならなくて、全てが無事に運ぶように祈らなければならませんでした。過酷な旅でした。戦闘があったので、進むのを防ごうとした軍によって止められました。バスいっぱいの乗客が殺されているのを見ました。夜、帰り道で撃たれました。国中、茶色で、死んでいるようでした。全ての収穫は燃やされていました。遠くに緑の丘を見つけました。そこが修道院だったのです。

修道女のうちの6人はツチ、6人はフツでした。2つのグループが一緒に平和と愛のうちに生活していた数少ない場所でした。彼女らは、虐殺においてほとんど全ての家族を失いました。若いノビス・修練者だけは助かりました、がそこにいる間、彼女の出身の教会の司祭から彼女の家族の全滅のニュースが入りました。彼らは一緒に常にニュースを聞きます、そのため、彼らは起こった全てを共有することができました。そして、ゆっくりと、あらゆるグループの人々は祈りに、この安全な場所で作物を栽培するために教会に集まるようになりました。それは、茶色で焼けた土地の中で緑の場所であり希望のしるしでした。

もう一つの例、完全に異なるタイプのお話をしましょう。教皇ヨハネ・パウロ2世がエルサレムを訪問した時、ラビ・ジョナサン・サックス師によると、多くのイスラエル人は懐疑的でした。

この訪問によって、どんな違いが生じるかと。より多くの言葉やドキュメントだけ。しかし、教皇が嘆きの壁に行って、神殿の破壊を嘆いているユダヤ人と沈黙をそこで共にした時、状況を変えました。教皇は、彼らの孤独を共有しました。彼らは心動かされました。‘かつて神殿であった壁にたたずむひ弱な老人、孤独な個人の光景によって、壁はかけ離れていた世紀の重さをよみがえらせ、過去を後悔し、前向きな新しい方法を始めると彼らに決心させました。’これは、分裂を癒やしたしるしでした。多分、全ての世紀の恐ろしい苦痛がどのように克服されるか想像することが不可能だったでしょう、しかし、ジェスチャーはまだ言うことができないことのしるしによって、より近くに平和をもたらしました。コミュニティを構築して、関係を変える創造的な行動です。9.11の後、我々は想像力を使わなければなりません。どのようなジェスチャーがイスラム教徒と我々の間でコミュニティを構築しますか？交わりの大胆なしるし

がそうするかもしれない？

最後の晩餐についての最後の点を話させてください。これは、希望がないと思われた時に祝われる希望の秘跡です。将来が語られるストーリーが、ありませんでした。それは、将来を指しませんでした。ある意味では、将来はその時割り込みました。彼らが切望したことは、この瞬間に先取りされました。死に直面して、兵士がイエスを殺すために近付いたときでさえ、彼らは飲食していました。将来が垣間見られた瞬間が重要でした。

キリスト教徒として、我々は永遠を望みます。しかし、永遠は時間の終わりに起こることではありません。また、我々が死んだあと、起こることではありません。我々が神の命を共有するときはいつでも、それは今始まります。我々がいつなにか憎悪を愛で包み込むことができるかということは、今始まります。それで、エウカリスチア・ミサの挙行は、神の国への望みの秘跡です。神の国は現在垣間見られます。その祝いにとどまることができます。将来は、今でも垣間見られます。イエスとともに十字架にかけられた犯罪人の一人に言うように、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」。それは復活の前にさえあります！将来のどんなしるし話することができますか？

もう一度ちょっと短く心に浮かぶことに言及させてください。これまでに出席した最も感動的なクリスマス徹夜祭は、1995年にパリのものでした。それはパリの中心で大きいテントの中で祝われた放浪者のためのクリスマスミサでした。司祭はスペインのドミニコ会士・ペドロ・メカでした。その人はパリの通りで放浪者のように生きて、シャワーと食事のために週に一度彼の仲間の所に戻って来ます。仲間は彼が食事の前にシャワーを浴びることを望むと思います！全て、貧困である者、ホームレスと浮浪者は、招待されました。1000人は来ました。それは、時には強烈な混乱した喜びの祝いでした。祭壇はダンボールで造られていました。今日ダンボール箱で生きる者すべてのために生まれたキリストを誉め称えました。ペドロが奉献でワインのボトルのコルクを抜いたとき、歓呼は響きわたりました。その後、誰でも素晴らしい食事に招待されました。それは、神の国のしるしでした。富める者と貧しい者の境界が交差して、それを越えるような神の国が現存する喜びを示したジェスチャーでした。

最後の例：2002年4月に、カイロを訪問しました、院長は観光客によって決して訪問されない都市の一部ムカタンへ連れて行きました。ゴミ集めの人々が生きる所です。彼らは約300,000人。多くがキリスト教徒です。訪問したのは、最も汚くて臭いのする所です。子供たちさえ歳をとっているように見えて、無気力で通りでサッカーをしています。毎日、彼らはゴミから何かを拾い集めるために都市までロバの荷車で出かけます。何が利用することができ、リサイクルされることができるかで整理します。帰り道、都市の向こうの大きな崖があります。その上に、ポーランドのアーティストは、栄光の大きなしるしを描きました：キリストの復活、天の国への昇天と栄光のうちの来臨です。帰り道、これらのサインを見て、彼らがムカタンの市民でなく神の国の民であることを思い出します。それもまた、今、神のみことばを語ることです。

かつて、私がこれを語ったとき、宗教が、マルクスが言ったように、人々のま



さにアヘンであることを示唆されました。現在の惨めさの後、幸せな将来を約束することによって、運命と人々をあきらめさせ、彼らが不当なシステムに疑問を呈するために立ち上がるのを思いとどまらせると。しかし、私はこれを否定します。我々が現在より良い世界のためにあえて働くのは、明らかに希望のしるしのためです。あなたが人類が幸せを予定されている、そして、我々の命が不条理でないと本当に思っているならば、よりよくなると期待できない時でも、正義のための行動にかかわる価値があります。ゴミ集めの都市の訪問に連れて行ったドミニコ会士は、カイロで最も貧しい人々へきれいな水を運ぶキリスト教・イスラム共同計画にもかかわっています。希望のしるしは、行動の代わりではありません。ほとんど即座の結果を見ることができない時でも我々を支えます。

中世の神学者は、希望は我々みんなを若くしておく美德であると考えました。それは、神の永遠の若さの美德です。聖アウグスチヌスは、『神は、他の全てより若いです』と言います。我々は歳をとりました、しかし、神は我々より永遠に若いままです。希望は、神の永遠の若々しさ、神の力強い新鮮さを表します。希望についての C・ペギーの有名な詩では、それが彼自身の 9 才の娘で象徴されます。『現在、この娘は希望し、彼女自身が常に始めます』と、聖トマスが『若さは、希望の源です。若い間、将来は長く過去は短いです』と述べています (II II 40.6)。そういうわけで、西欧諸国の出生率の低下は、絶望の兆しと原因です。毎年、我々は誕生日を祝います。1 年ずつ歳をとっていくことを祝います。歳をとっていくのを思い出す時です。しかし、キリストの誕生を祝うとき、神が幼子で我々の間に生まれたことを祝います。去年のクリスマスでイエスが 2006 歳になったことを祝いませんでした、イエスは幼子でした、神は我われの間で常に新生児であって、常に始めて、常に新鮮です。

私は、大量虐殺の後、ルワンダに戻りました。25 年間そこで働いたカナダのドミニコ会士は、暮らした所の残骸を見るために連れて行きました。多くの友人は死にました、そして、生涯に亘る仕事は破壊されたようでした。我々は、一緒に涙を流しました。次のクリスマスに、彼は大きな 2 人のルワンダの赤ちゃんを抱いて、彼自身の写真を送ってきました。『アフリカには将来がある。』と裏書きされていました。年毎に子供の誕生を祝い、『人類には将来をがある』と言うこともできます。

『お前はどこへ行くのか?』、旅の途上の騎士は言いました。より良い世界への道の路線図を持っていません、しかし、我われと全人類が、すべての苦しみから解放される神の国へ行く途上にあると信じます。キリスト教徒には人類がそのゴールに達する方法に関して機密情報はありませんが、暴力を通してでないということを知っています。そして、我々は全人類に我々の希望を語るしるしを作ることができます。